

主人公映画では女性

文人の 武蔵野

これまでの連載では、大岡昇平の語る創作意図に基づき、小説「武蔵野夫人」(1950年)の主人公を「勉」としてきました。しかし、読者の立場からは、道子ら女性たちを主人公とする読み方もなされてきました。例えば、映画「武蔵野夫人」(51年)

大岡昇平 ①



映画監督の溝口健一(国立国会図書館 近代日本人の肖像)から。「武蔵野夫人」を始め、数々の名作を残した

を監督した溝口健一は、次のように述べています。

「当然主人公は哀愁の影長く曳く道子であるが、私もこの主人公道子と道子をとりま

く三人の男を中心に描いて戦後派の風俗である富子の映像に焦点を合わせてゆきたいと考えている。」(「武蔵野夫人パンフレット」51年9月)

原作の主人公は「当然」道子であるが富子にも焦点を合わせるとしています。空襲に焼け出された道子は、夫である秋山を連れて武蔵野(小金井)の実家に戻り、財産としての土地を守り、やがて武蔵野をこよなく愛する勉との愛に殉じます。富子は道子の従兄である大野の妻で、彼女には秋山からの誘惑をあしらす奔放さがあります。溝口には富子が「当世風の哀れな女性」と見えています。

溝口監督は、道子と富子のふたりをメインの登場人物に据えました。すでに映画界の巨匠だった溝口監督の映画の影響は大きいので、作者がいくら勉の物語だと主張しても、悲劇めいたヒロインの物語だと受けとめる人は少なうなかつたのではないのでしょうか。

映画は、「姦通」の主体としての秋山夫人と大野夫人にスポットライトを当てました。タイトル通りに武蔵野夫人を主人公とみなし、ややスキャンダラスな匂いのする夫人の不倫ものとみなす読者も増えたように思われます。ただし、小説の本文に「夫人」

という言葉が出てこないことも忘れてはいけません。

「わが小説」の中で大岡は、小説が題に引きずられ、多くの読者を得たことについて、作者として認めています。と同時に、「夫の側室」を意味する「夫人」という字が嫌いであるとして、小説本文の中には使わなかったことについても言及しています。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。